

【都市と美術研究所】2024年1月9日（火）研究会 発表要旨

日本におけるマリー・ローランサン展
Marie Laurencin Exhibitions in Japan

由良茉委（都市と美術研究所招聘研究員）

YURA Mai

Adjunct Researcher of Institute of City and Art, Waseda University

マリー・ローランサン（1883-1956）はエコール・ド・パリを代表する画家の一人で、その作品は母国フランスだけでなく、今日世界中の美術館や個人コレクションに所蔵されている。なかでも、かつて世界で唯一となる「マリー・ローランサン美術館」を有した日本は、とりわけローランサンの知名度が高い国であり、現在も同美術館事務所が世界最大規模のコレクションを保持していることから、作品を実見する機会に恵まれた場所といえる。

日本に初めてローランサンの作品が伝えられたのは、1914年に東京の日比谷美術館で行われた、ドイツのシュトゥルム画廊による移動展である。以来、キュビズムの数少ない女性画家として、また「ミラボー橋」などの作品で知られる詩人ギヨーム・アポリネールの恋人として、日本国内でローランサンの名前が広まり、特に1970年代から1980年代にかけては数多くの回顧展が開かれた。

生誕140周年となる2023年には、「マリー・ローランサンとモード」（2023年、Bunkamura ザ・ミュージアム、京都市京セラ美術館、名古屋市美術館）や、「マリー・ローランサン 時代をうつす眼」（2023年-2024年、アーティゾン美術館／2024年3月3日（日）まで開催中）などの展覧会が行われ、ローランサンの芸術に再び注目が集まっている。日本におけるローランサン展の歴史を概観すると、美術展と社会の関わりや、鑑賞者の意識の変化、また外国人作家受容の諸相が浮かび上がる。

本発表では、ローランサンを研究対象とする発表者の視点から、国内外での最新の研究動向を踏まえ、現代日本におけるローランサン受容の一端を検討する。

略歴

1994年東京都生まれ。早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了。2019年より同大学院博士後期課程在籍。専門はフランス近現代美術史。主な論文に、「マリー・ローランサンの「狩りをするディアナ」主題作品をめぐる考察」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第67輯、早稲田大学文学研究科、2022年、pp. 553-70）など。